

〔翻訳者ノート〕

人類博物館か人間博物館か

吉田 泰幸

(金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター客員准教授/セインズベリー日本藝術研究所客員研究員)

はじめに

ナタン・シュランガー (Nathan Schlanger) はフランス出身で、英国のケンブリッジ大学に学んだ考古学者である (1995年に同大学にて博士号取得)。先史時代の技術研究、物質文化研究、考古学史や考古学遺産管理の比較研究を専門としている。国立ルーブル美術史研究所、開発に伴う緊急発掘を行う公的機関である国立事前考古学研究所⁽¹⁾ (Inrap: Institut national de recherches archéologiques preventives) を経て、現在はフランス国立古文書学校の教授とフランス国立科学研究センターの共同研究ユニットメンバーを務めている。

今回筆者が訳出したのはシュランガーが *Antiquity* 第90巻352号の Debate 欄に寄せた批評文 “Back in business: history and evolution at the new Musée de l’Homme” (2016) である。2015年にリニューアルオープンしたフランス・パリに所在する Musée de l’Homme (以下、訳文と同じく MH と略す) に関する批評で、フランス語が母語のシュランガーが英語で寄稿したものである。2018年には *Ethnologie française* 誌に同批評文のフランス語版が掲載されたが (2018)、今回の翻訳は英語版をもとにしている。

縄文時代研究から研究活動をスタートした筆者にとって MH は、戦後日本における「縄文」のポピュラー化に重要な役割を果たした岡本太郎のパリ時代のエピソードで知った存在である。岡本が1930年代のパリ滞在中に、人類学者のマルセル・モースに師事するとともに MH を頻繁に訪れており、その経験が戦後の岡本の東北や沖縄など、日本各地での人類学的／民族学的フィールドワークに繋がっていったことを、いくつかの岡本太郎研究から知った (赤坂2007、榎木2003など)。以降、パリには MH があることが記憶された。

筆者がはじめてパリを訪れたのは2015年7月で、東南アジア考古学関係の国際学会参加のためだった。学会の空き時間に東洋の考古・美術コレクションで名高いギメ美術館、ケ・ブランリー美術館 (Musée du quai Branly、以下 MQB) を訪れ、さらに MH を訪れようとシャイヨー宮に向かったものの、閉館中だったことには落胆した。単に筆者の下調べが不十分なだけだったが、再オープンはその遠くないことは広告バナーで確認できたので、その際には訪れたいと考えていた。そんな折、2016年11月にシュランガーの案内で展示を見ることができた。次にその経緯を記す。

翻訳に至る経緯

筆者は2016年、大阪文化財研究所と英国・MOLA (Museum of London Archaeology) の共同プロジェクト “Archaeology, Place Making and Art in Japan and the UK” (2016年1～12月) のメンバーとなっていた。このプロジェクトは英国と日本を相互訪問しながら、文化遺産に関連づけたアートと考古学がともに取り組むまちづくり (Place Making) の事例を視察し、事例集を作成することが目的だった。筆者は京都文化博物館学芸員の村野正景、歴史復元イメージ画家の安芸早穂子とともに同年11月、日本から英国・ロンドンを訪問するパートに参加した。シュランガーは東日本大震災後に福島県を訪れ震災復興関連の緊急発掘調査を視察 (Schlanger, Nespoulous, and Demoule 2016)、2016年の世界考古学会議 (World Archaeological Congress) 京都大会期間中に村野・安芸らの尽力によってサテライト会場で行われた Art & Archaeology 展示についていち早く報告を執筆する (Schlanger, et al 2016) など、日本考古学界ともすでに縁があったことから、英国からの帰り道にシュランガーを訪問するために

もパリを経由することが提案された。結果的に芸と筆者でパリを訪問した際に、シュランガーの案内でパリ市内のMQBとMHを巡ることができた。その後、シュランガーは自身の論文等のPDFをいくつか送ってくれた。そのひとつに訳出したMH批評があった。その批評はリニューアル後すぐに出された鋭い批評であること、MQB開館に比べて、歴史あるMHの再始動は日本であまり話題になっていないことを鑑み、翻訳による紹介を思い立った。以上が翻訳に至る経緯だが、以下ではMHが喚起する人類学や考古学、博物館の諸問題について補足的に述べたい。

翻訳不可能性

翻訳は読みやすさを求めたつもりではあるが、直訳にすぎるところも残っているのは確かである。そして、その作業はよく言われるように言葉選びに関する苦難の連続だった。

日本語が堪能なロラン・ネスプルス (Laurent Nespoulous) に翻訳草稿について意見を求めたところ、中谷治字二郎はトロカデロ民族学博物館 (Musée Ethnographique du Trocadero) をトロカデロ「土俗」博物館と、民族学研究所 (Institut d'ethnologie) を「人種学」研究所と訳しており (中谷1985)、当時のフランス民族学の状況を考えれば、中谷の訳に批評的意図があるかは別として、的確な訳ではないかとの指摘も受けた。このように、比較的訳出には迷わないと予測していた組織名称も言葉選びに逡巡した。そしてタイトルにも含まれている Musée de l'Homme という館の名称も問題だった。著者のシュランガーはアフリカをフィールドに翻訳不可能性の問題を取り上げているが (2015)、彼によれば西洋諸語でアフリカの現地語に翻訳が難しい語のひとつは“Museum”に相当する語だったとのことである。“Museum”は日本語の「博物館」とも完全には対応しないが、それ以上に“Homme”の部分も問題だった。MHは多くの日本語の文章では、「人類博物館」と訳されているが、本訳においては文中ではMHの略称で通し、タイトルにのみ訳語を含めて、その訳は「新・『人間博物館』、その歴史と進化」とした。「人類」とするか「人間」とするかは些細なことのように思えるし、両者のニュアンスの違いをどう感じるかは、人それぞれだろう。筆者が

感じる差異を本稿中でうまく表現できるかは心もとないが、まずはその違いに言及しているMQB批評について触れたい。

MQBがオープンした2006年の翌年、雑誌『芸術新潮』は2007年3月号で「パリのびっくり箱——ケ・ブランリー美術館に行こう！」特集を組んでいる。その特集は大型の新美術館の開館ということもあって、館の宣伝広告のようにMQBとその収蔵品の素晴らしさを紹介しているが、合間に吉田憲司によるアフリカ研究者・人類学者からみた、特集全体の基調である新美術館とコレクションへの賛美とは距離をとった解説が入るという構成になっている。特集の各所でMQBのコレクションの由来も説明され、その多くがもとはMHのコレクションだったことにも触れられている。特集の中には川田順造による特別寄稿があり、ここでもMHへの言及がある。川田寄稿文のみ、「ケ・ブランリー美術館」ではなく「ケ・ブランリー博物館」と表記したことが付記されている。このことは川田がMQBを「美術館」と称することに違和感があること、先述したように“Museum”・“Musée”は他言語への翻訳不可能性を孕んでいることを示している。川田は美術商との関係や過去の植民地主義の精算など、フランス人類学が逃れられない諸課題と、それらを反映せざるを得ないMQBに対する批判、つまり寄稿タイトルにあるように失望を記した後、未来に向けては複眼的に人類文化をながめる拠点として、MQBが「新しい時代に生きる『人間博物館』に改造されて行くこと」(2007: 94)を希望として述べている。川田にとっては、「人類」と「人間」との間にはニュアンスの差異があり、「人間博物館」はまだ見ぬ理想の博物館ということだろう。川田特別寄稿の時点では主要コレクションがMQBに移管されMHはほぼ解体状態にあったため、「人間博物館」実現への期待はMQBが負っていた。しかしMHが残されたコレクションをもとに帰ってきた2010年代後半においては、その期待の行く先は奈辺にあるだろうか。

フランスの考古学者からみたMH

シュランガーの批評文を一読すれば分かるように、彼はMHの展示をかなり批判的に論じている。批判の要点は2点ある。ひとつは目を閉じた多く

の胸像（ライフキャスト、生きた人間を石膏で型取りした胸像であることを示している）をもとにした展示の論理と倫理である。もうひとつは展示全体のメッセージについてであり、人類進化の行き着く先がグローバリゼーションと描かれることに対してである。

MHの常設展示は、シャイヨー宮南翼の2階から踊り場の中3階を経て3階にかけて展開しているが、ハイライトのひとつである胸像シリーズはそのすべての層に渡っている。シュランガーの胸像シリーズに対する批判の要点は、フランスの学術発展に貢献した偉人は個人名で胸像がつくられるのに対し、目を閉じた多くの胸像はあるエスニック・グループの典型例、同質集団の代表例として位置付けられることにある。この批判の仕方は美術展示における“primitivism”に向けられたものと似ている。西洋における「アート作品」には個人名や制作年が付されるのに対し、“primitive art”はある部族の作と表記され、制作年も表示されず、文化的コンテキストが無視されて一方的に「アート」と西洋社会から認定していること自体に批判が向けられる⁽²⁾が、この批判とシュランガーの胸像シリーズ批判は重なる部分がある。これはフランス人類学が「人種学」であった⁽³⁾ことへの反省、それを可能にした植民地主義への反省というポスト植民地主義に根ざした「構え」が、少なくとも西洋諸語圏では人類学を問わず、人文学に携わる者の基本的な構えのひとつになっていることを反映したものだだろう。その点でシュランガーの批判の仕方は理解できるものの、この胸像シリーズ展示には19世紀中頃の人体測定器も展示されていて、それを覗き込むと骨相学の始祖であるピエール＝マリー・デュムティエ（Pierre-Marie Dumoutier）⁽⁴⁾の胸像（目が閉じており、自らをライフキャストの対象としたことがわかる）が奥に配置されており、彼が測定されているように見える、つまり、「測る・測られる」の関係が逆転する仕掛けになっていることは指摘しておきたい。

シュランガーがもうひとつ問題にしているのが、「進化」概念の「文化」への適用である。西洋社会を「進化」の到達点とする考え方は批判されてきたものの、現在は「進化」の到達点を主に先進諸国が主導する「グローバリゼーション」に

スライドさせているだけで、MHの展示はそうした考えを反映しているのではないかという疑問を投げかけている。グローバリゼーションの懸念のひとつは文化の画一化で、それに抗うような文化的多様性の象徴として携帯電話ケースに着目している。シュランガーはマルセル・モースを「MHの文化的英雄」とも言う。そのモースが「戦時中、急速な国際化や自由貿易規範には批判的で、小規模で自律的な共同体や労働者の福祉受益の権利を支持していた」ことも併せて紹介している。MHのリニューアル後に先進諸国で起きたことは英国の国民投票でEU離脱票が上回ったこと、米国ではドナルド・トランプ大統領の誕生、フランスでは燃料税引き上げに対する大規模デモであり、それぞれの重要な支持層は富裕層を生み出すグローバリゼーションという仕組み、国際化や自由貿易規範とは反対の方向を支持している。想定問答としてモースは英国・米国・フランスで起こったことをどう考えるのか、文化的多様性の重視でグローバリゼーションの諸問題は乗り越えられるのか、あるいは、この先どういった「進化」像が描かれるべきなのかも問う必要があるだろう。

「自文化」と「他文化」を本質化し、その間に権力関係や不平等が存在していたからこそ民族学・人類学が可能となり、ライフキャスト胸像は生まれたとも言える。それらを並べた胸像シリーズ展示はポスト植民地主義の視点からは批判しやすい。グローバリゼーションは、多文化主義や文化相対主義の危機でもある。そう考えると、シュランガーの批判は人類学を支えてきた基盤とそれらへの問い直しに端を発しており、閉塞感にも陥りやすいように思える。人類学では閉塞感を超えて今後どうすべきかを問い出すのは必然で、一部で様々な乗り越え運動が実を結びつつあるとの認識もあるらしく（前川・箭内他編2018）、それらの果実には民族誌のあり方の見直しなど、人類学の成果の表現形式への問いも含まれる⁽⁵⁾。MH批評文の冒頭のモースの引用は、応用人類学（社会学）の提唱を先駆的行なった文章からなされたものである。展示も表現形式、応用人類学のひとつとすれば、MH展示の可能性を掴み取る、感じ取る文章も同時に紹介した方がいいのではないかと考え、シュランガー、筆者とともにMH展示をみた安芸早穂子に寄稿を依頼した。

芸術家からみた MH

安芸早穂子は画家、イラストレーターで、民族考古学者の小山修三との共同作業による縄文時代の復元画などで知られる⁽⁶⁾。上述の世界考古学会議京都大会における Art & Archaeology 展示を実現するべく奔走し、特に建仁寺両足院での“Garden of Fragments”展でも中心的な役割を果たした。MH 観覧を経て帰国して間もなく、安芸は青森県のウェブサイト「縄文 FAN」内の連載コラム「縄文探検につれてって！」の第92回「パリコレ発掘とニューモード博物館」に MH での感動を綴った文章を投稿したが、それも下敷きに、今回の文章を執筆願った。

安芸の文章は、普段安芸がコーディネーターを務める工作クラブなどで多くの子どもと接している経験をととして生まれた問題意識に基づいて、次世代の人間のためにモノと博物館にできることは何かを問うことから始まる。国立民族学博物館の「イメージの力」展での感想も絡めながら、博物館をリニューアルする際に、またリニューアルでなくても膨大な収蔵品の中から何を選び出しどのように展示するのか、そのプロセスでできることは「博物館入り」の語感とは反対の「現代的であろうとすること」だとする。

シュランガーの言う「胸像シリーズ」展示に対する印象が、シュランガー、筆者、安芸で異なるのも重要な点だろう。批評文中では一貫して批判的なトーンで MH 展示を評するシュランガーだが、実際に展示を案内する時には、文中でもっとも批判の対象とした胸像シリーズはとても好きな展示で、その理由は「問いを、議論を喚起するから」と述べていた。MH リニューアルは博物館にとって普遍的な問いを、その気になれば数多く読みとれる、感じ取れるものになっている。シュランガー、安芸、筆者三者の文章を並べたことでそのことが伝われば幸いである。

最後に、安芸は MH のポール・ゴーギャン由来の問い「われわれはどこにいくのか」を突き詰めるならば、視覚芸術にとどまらない様々なアートの居場所を作るべきだとする。これは Art & Archaeology と言った場合に、研究成果の説明や展示を含む過去の表象のアート化（あるいはデザイン化）にとどまらない活動が模索されている中でなされた提案であることを補足しておきた

い。

日本の考古学者からみた MH

筆者の MH 展示への感想も述べておこうと思う。岡本太郎が通っていたらしいことが、もともと筆者が MH を知るきっかけだが、リニューアルされた MH はそのコレクション構成も、コンセプトも 1930 年代とは全くの別物として生まれ変わっている。その原因は新世紀に入ってから MQB の開館だが、MQB には何が移管され、MH には何が残ったのだろうか。両館の常設展示を見た筆者の印象は、MQB = 文化、MH = 自然という図式である。より正確に言えば、MQB = シュランガーが言うところの「個人主義的な劇場をつくる」「土曜の午後にシャイヨー宮を訪れることができる」「われわれ」が「文化的」だと思える「文化」の産物であるモノたち、MH = 「文化的」な存在に進化する以前の自然に近い人間に関するモノ + 自然としての人間および自然の全体像を掴もうとする博物学のモノ + MQB が「文化」とみなさなかつたモノたち、といったところだろうか。MQB には MH から「文化」の大半が移管されたのかもしれないが、安芸の言うようにそれを逆手にとって、「自然」の観点からは共通した人体をもつ人間が生み出す文化の多様性を表現しようとした、人間の普遍性と多様性をみつめる展示と評価できると思う。

もうひとつ言及しておきたいのは、想像上の石器時代人像を表現した彫刻や 19 世紀後半に始まる先史時代人をイメージした絵画、多くの剥製に加えて動物を自然主義的に表現した彫刻などがあちこちに配置されており、「人間や自然をこのようにみてきた近代のわたしたち」に対する俯瞰視点⁽⁷⁾を意識せざるを得ない作りになっていることである。それらが世界各地から収集され展示されている人間・動物像と対置された時、先述の文化 / 自然の二分法の境界が溶解する感覚を味わうことができる。そうした特徴は筆者が 2018 年 9 月に MH を再訪した際に行われていたネアンデルタール展⁽⁸⁾でも顕著で、ネアンデルタール人に関わる客観的な形質人類学的、考古学的資料が並ぶ合間に、「ネアンデルタール人をこのようにみてきたわたしたちの視座」を表象するネアンデルタール人の復元胸像、復元イメージ画なども数多く展示

されていた。こうした視座の複数性によってさまざまな思考、議論を喚起するつくりになっているのが、MHの大きな特徴だと思う。

おわりに

なぜMHを「人類博物館」ではなく「人間博物館」と訳したか、明確に答えられる訳ではない。展示における古人類関係資料の充実からは、MHは確かに優れた人類学博物館と言えるし、展示終盤にある義手・義足や、フィクションに登場するキャラクターが並べられた展示ケースが示唆するサイボーグ化に向かう人類には、人間とは、人間性とは、が問われることが予想される。どちらの訳でもよい気もするが、MHは間違いなくかつてとは異なるものとして再始動したこともあり、これまで多くなされてきた訳である「人類博物館」とは違う訳を提示することで、両者の差異の他言語への翻訳不可能性を自覚しつつも、日本語で書いた文章における問いとしたい。

過去の好奇心が引き起こした様々な結果の集積である現在の博物館コレクションの状況を振り返り、他者理解に繋がることもあれば、暴力的かつ政治的に正しくない結果も生み出すこともあると言う両義性から逃れられない好奇心の歴史・現在、そして将来にどう向き合うかは、全ての博物館に課せられた課題であり、研究資源の管理を博物館に負うことも多い人類学、考古学、美術史、民具学その他の物質文化学の課題でもある。MHはその課題が凝縮したような博物館のひとつであり、そのリニューアルに際して出されたレビューの訳出を今回試みたのは、その課題を広く共有するためでもある。川田順造の期待は「複眼的に人類文化を眺める」場としての人間博物館だったが、シュランガーの批評と安芸の提案など、様々な意見が交錯し共存し互いに刺激し合うような、博物館自体を複眼的に眺める場の創出も博物館の「進化」には必要だろう。

謝辞

翻訳を快諾していただいたナタン・シュランガーに深謝の意を表す。文意に関わる筆者の詳細な質問にも丁寧に答えていただき、掲載元の *Antiquity* 誌への翻訳許諾の問い合わせまでしていただいた。さらに、筆者の2回目のMH訪問時（2018年9月）には、過去

にMHも積極的に関わったフランス人民戦線が勝ち取った週40時間労働の産物である週二日の休日の内の半日を、筆者の案内に費やしてくれた。また、フランス国立東洋言語文化研究所のロラン・ネスプルスには翻訳草稿についての確かな意見を数多くいただいた。

本稿は科学研究費補助金・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）「先史時代イメージの分析による考古学・博物館学への内省的アプローチ」（課題番号：17KK0022、研究代表者：吉田泰幸）の成果の一部を含んでいる。

註

1 Archéologiques Preventives にも本稿のテーマのひとつ、翻訳不可能性がある。ここでは日仏の考古学および調査体制に造詣の深い稲田孝司による訳をあててある。稲田も preventive のニュアンスの訳出には苦慮したことがうかがえる（稲田2014: 221-222）。Inrapのウェブサイトには「De l'archaéologie de sauvetage a l'archaéologie preventives (From rescue archaeology to preventive archaeology)」というページがあるように、salvage/rescue と preventive の間には、フランス考古学の文脈に根ざしたニュアンスの違いがあるらしい。

Inrap: <https://www.inrap.fr>

De l'archaéologie de sauvetage a l'archaéologie preventives: <https://www.inrap.fr/de-l-archeologie-de-sauvetage-l-archeologie-preventive-9724>

2 ニューヨーク近代美術館（MoMA）で開催された「20世紀におけるプリミティヴィズム展——部族的なるものとモダンなるものとの親近性」に対して向けられた批判のひとつにジェイムズ・クリフォードによるもの（クリフォード著、古谷訳2003）があり、展示をめぐる論争については吉田憲司が詳述している（1999）。

3 フランス民族学・人類学の歴史や人名の日本語表記はレリス著・岡谷他訳2010[1995]、ナンタ2016、パリゴ2016を参照した。

4 デュムティエはフランスの探検家、ジュール＝デュモン・デュルヴィル（Jules-Dumont d'Urville）に同行して、南太平洋地域の人々のライフキャストを数多く制作した。マオリとスコットランド双方にルーツを持つアーティストであるフィオナ・パーディングトン（Fiona Pardington）がMHに所蔵されているマオリの祖先のライフキャストなどを写真作品にしている（Baker and Rankin eds. 2011）。そ

これらの写真作品をみると、デュルヴァイルとデュムティエ本人だけでなく、彼らの家族のライフキャストも製作されていたことが分かる。

- 5 『美術手帖』2018年6月号「アートと人類学」特集にある、映像人類学を Sensory Ethnography (感覚民族誌学) と捉え直す試みなどが、表現形式への問いに相当するかと思う。
- 6 安芸と小山の復元イメージ作成の過程などは金沢大学国際文化資源学センターが2014年1月に開催した文化資源学セミナー「歴史復元画と考古学」に詳しい。セミナー記録・論考集を参照願いたい(安芸2017・小山2017・吉田泰編2017・吉田泰2017)。
- 7 こうした視座はMQBの特別展にもみることができ。筆者が2018年9月に訪れた際には、Le magasin des petits explorateurs (The Little Explorer's Box of Delights)、Peintures des lointains (Paintings from afar) という二つの特別展が開催中で、どちらも「異文化をこのようにみてきたわたしたち」という視座が多角的に理解できるものであった。
- 8 ネアンデルタール展 (Néandertal l'Expo) は2018年3月から2019年1月まで開催。大部の図録が刊行されており、その様子を窺うことができる。

文献

赤坂憲雄

2007 『岡本太郎の見た日本』、岩波書店。

安芸早穂子

2017 「縄文人をどのように描いてきたのか」吉田泰幸・John Ertl 編『Japanese Archaeological Dialogues—文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016』、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター、60-76頁。

Baker, Kriselle and Elizabeth Rankin (eds.)

2011 *Fiona Pardington: The Pressure of Sunlight Falling*. Dunedin: Otago University Press.

クリフォード, ジェイムズ

2003 「部族的なもの」と近代のものの歴史」(古谷嘉章訳)『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』(太田好信・他訳)、人文書院、245-272頁。

稲田孝司

2014 『日本とフランスの遺跡保護—考古学と法・行政・市民運動』、岩波書店。

川田順造

2007 「失望と期待—一新博物館が提起するもの」『芸術新潮』2007年3月号: 88-94

レリス, ミシェル

2010 『幻のアフリカ』(岡谷公三・田中淳一・高橋達朗訳)、平凡社(1995年、河出書房新社)。

小山修三

2017 「なぜ「おしやれ」な縄文人を描こうとしたのか」吉田泰幸・John Ertl 編『Japanese Archaeological Dialogues—文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016』、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター、77-84頁。

前川啓治・箭内 匡・他編

2018 『21世紀の文化人類学—世界の新しい捉え方』、新曜社。

中谷治宇二郎

1985 『考古学研究への旅—パリの手記』、六興出版。

ナンタ, アルノ

2016 「人種主義と科学者の「中立性」—アンリ・ヴァロワの活動を中心に」坂野徹・竹沢泰子編『人種神話を解体する2—科学と社会の知』、東京大学出版会、81-101頁。

パリゴ, キャロル=レノー

2016 「フランスにおける形質人類学の変遷史: 一九世紀末からの人種科学をめぐる」(小林新樹、アルノ・ナンタ訳)、坂野徹・竹沢泰子編『人種神話を解体する2—科学と社会の知』、東京大学出版会、61-80頁。

榎木野衣

2003 『黒い太陽と赤いカニ—岡本太郎の日本』、中央公論新社。

Schlanger, Nathan

2015 On Translating the Untranslatable, African Heritage ... in African. In: Monique H. van den Dries, at el. (eds.), *Fernewh: Crossing Borders and Connecting People in Archaeological Heritage Management*. Leiden: Sidestone Press, pp. 96-100.

2018 Retour aux affaires : histoire et évolution au nouveau musée de l'Homme. *Ethnologie française* 172: 743-750.

Schlanger, Nathan, Laurent Nespoulous, and Jean-Paul Demoule

2016 Year 5 at Fukushima: a “disaster-led” archaeology of the contemporary future. *Antiquity* 360: 409-424.

Schlanger, Nathan, Jean-Paul Demoule, Lamys Hachem, Laurent Nespoulous, Olivier Weller, and Nicolas Zorzin

2016 L'archéologie mondiale à l'heure du

Japon: Compte rendu du 8e World Archaeology Congress à Kyôto (28/08-2/09/2016). *Les Nouvelles de l'archéologie* 146: 49-54.

吉田憲司

1999 『文化の「発見」』、岩波書店。

吉田泰幸

2017 「歴史復元画を考古学」をふりかえる」吉田泰幸・John Ertl 編『Japanese Archaeological Dialogues —文化資源学セミナー「考古学と現代社

会」2013-2016』、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター、107-115頁。

吉田泰幸編

2017 「対話—これから縄文人をどう描くのか」吉田泰幸・John Ertl 編『Japanese Archaeological Dialogues —文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016』、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター、85-106頁。

(2019年6月19日受理)